



Kobe University Repository : Kernel

Title	英国文化における犬のイメージの変容 : 社会文化史およびコーパス言語学からのアプローチ(Changing Image of Dogs Seen in English Culture : From the Viewpoint of Society, Culture, and Language)
Author(s)	石川, 慎一郎
Citation	神戸大学国際コミュニケーションセンター論集,3:79-91
Issue date	2006
Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	publisher
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/00519051

Create Date:



英国文化における犬のイメージの変容： 社会文化史およびコーパス言語学からのアプローチ¹

石川 慎一郎²

1. はじめに：問題の所在

犬は一般に「人間の最良の友」(man's best friend)と呼ばれる。だが、ペットないし伴侶動物 (companion animals)としての犬の位置付けは、愛犬家の国として知られる英国においても、それほど古いものではない。犬は太古においては人間の使役動物であり、長く、運搬犬や番犬として奉仕した。しかしながら、犬は徐々にその社会文化的役割を変容させ、現代においては、人の伴侶動物としての色彩がより強まっているのである。

では、使役されるべき獣としての犬が、保護されるべき伴侶動物に変容を遂げたのはどのような歴史的段階であったのであろうか。また、英国について言えば、その変容はどのような社会文化的状況の中で起こったのであろうか。

2. 研究の方法：文化事象へのアプローチ

2.1 2つの視点

こうした文化的事象を研究する場合、従来は、当時の新聞・雑誌・文学作品などを個別的・単発的に調査する手法が多く見られた。しかしながら、その多くは俯瞰的な調査とはいいがたく、無数に想定される関連資料の中からなぜその特定の資料を取り上げたのか、あるいはその資料が当該の時代や文化をどの程度正確に反映しているかについてはあいまいなままであった。つまり、取り上げる資料の代表性という点において、従来の社会文化史的研究の多くは、方法論上の陥穽を内在していたと言える。

そこで、本研究では、社会文化史的研究に加え、大量の言語資料をデータとして扱い、言語の特徴性を客観的に抽出するコーパス言語学のアプローチを導入し、2つの視点から「英国社会における犬のイメージの変容」の問題に迫りたい。以下、それぞれの研究方法を概観する。

2.2 社会文化史的調査

社会文化史的研究に関しては、複数の図版や、動物保護関連の法制に着目し、犬の文化的イメージの変遷について考察を行う。既に指摘したように、もとより、こうした調査は網羅的・代表的なものではありえ

¹ 本研究は、CAIRC (Companion Animals Information & Research Center) 「人間とコンパニオンアニマルとの関係学」研究助成 (平成 17 年度)を受けて行われた「近現代英語散文コーパスに見るコンパニオンアニマルイメージの確立と変遷」研究の成果の一部である。

² 神戸大学国際コミュニケーションセンター／総合人間科学研究科言語論講座 iskwhin@kobe-u.ac.jp

ない。ゆえに本研究では、社会文化史的調査を、後で述べるコーパス言語学的アプローチを導入するための基礎調査として位置づける。

2.3 コーパス言語学的調査

2.3.1 文化研究とコーパス

コーパス言語学は辞書学・語法学・言語史の分野において広く活用されているが、それはまた、文化研究にも応用可能なものである(Stubbs 2002, Hunston 2002)。ただし、コーパスを使った従来の文化研究は、基本的に語彙の振る舞いを見るものであって、本格的な文化研究の道具としてコーパスを使用する試みはいまだ十分には行われていないように思える。いわゆる歴史的コーパスをのぞき、現在入手可能なコーパスの大半は、比較的狭い時間的スパンで資料を収集している。しかし、本研究のように、特定の文化的イメージの経年的変容過程を言語的に俯瞰するためには、時間的に幅をもったデータの構築が不可欠となる。

2.3.2 コーパスの構築

そこで本研究では、18世紀から現代にいたる英国の文化事象を量的に観測する基礎資料として、各時代の文学作品を収集した1700万語からなる英文学コーパスを構築した。コーパスに収録する作家は、英文学史においてキャンオン化している代表的な小説家とし、英国の近代文化の成立から成熟の過程を見る目的に照らし合わせ、データの収録範囲は18世紀前半から20世紀前半までとした。収録作家の一覧、および、時代別のデータ量は下表のとおりである。

表1. コーパス収録作家

時代	収録作家(生没年)
18世紀前半	Jonathan Swift (1667-1745), Samuel Richardson (1689-1761), Henry Fielding (1707-1754), Samuel Johnson (1709-1784)
18世紀後半	Laurence Sterne (1713-1768), Tobias Smollett (1721-1771), Oliver Goldsmith (1730-1774)
19世紀前半	Ann Radcliffe (1764-1823), Jane Austen (1775-1817), Mary Shelley (1797-1851)
19世紀後半	Charles Dickens (1812-1870), Emily Brontë (1818-1848), George Eliot (1819-1880), Thomas Hardy (1840-1928), Henry James (1843-1916)
20世紀前半	Rudyard Kipling (1865-1936), E. M. Forster (1879-1970), James Joyce (1882-1941), Virginia Woolf (1882-1941), D. H. Lawrence (1885-1930)

表2. 英文学コーパス語数

	18世紀前半	18世紀後半	19世紀前半	19世紀後半	20世紀前半	合計
語数	3974959	1494314	1129039	6640808	3812895	17052015

合計で 1700 万語のテキストデータは、時代別に 5 つのサブコーパスに分類した。個々の作家は長い時間にわたって執筆活動を行っている場合もあり、50 年単位の区分に分類することは厳密には難しいが、ここでは各作家が 40 歳になった時点を規準にした。たとえば、Samuel Richardson(1689-1761)の場合、彼の生涯は 17 世紀の終わりから 18 世紀の後半にまたがっているが、40 歳に相当するのは 1729 年となるので、彼の作品データは 18 世紀前半に区分することとなる。

文学コーパスの構築に当たっては、マテリアルの選定が課題となる。McEnary, Xiao, & Tono (2005)でも触れられているように、コーパスの代表性(representativeness)をふまえると、資料の取り方についてはいくつかの議論の余地があるが(どの作家から取るべきか、また、ある作家のどの作品を取るべきか、さらにある作品を取ると決めた場合に、その一部をサンプリングするべきか全体を取るべきかなど)、ここでは、時代を代表する作家の散文作品を可能な限り悉皆的に収集し、フルテキストをデータとして取る方針を採用した。「犬」という文化的トピックは、言語学的トピックと違って、作品に遍在するわけではなく、調査の妥当性を高めるためには、機械的なサンプリングよりも、一定のデータ量を確保しておく必要があったためである。

こうして作成されたコーパスデータを各種のコンコーダンスで処理・分析し、犬のイメージについて言語的視点から考究を行った。

3. 結果と考察

3.1 社会文化史に見る犬

冒頭でも触れたように、現在、犬は「人の最良の友」として広く認識されているわけであるが、こうしたイメージは必ずしも古いものではない。たとえば、歴史主義に基づき編纂された *Oxford English Dictionary*(3 版草稿原稿)によれば、“pet”という語の初出は 1710 年とされる。

1710 R. STEELE Tatler No. 266 2 The other has transferred the amorous Passions of her first Years to the Love of Cronies, Petts and Favourites [a dog, monkey, squirrel, parrot].

また、トマス(1989)によれば、英国の「都市の発展と、動物を生産過程からしだいに追いだしていった産業状況」の帰結として、「労働で直接動物とかかわって」いない中産階級に動物保護の精神が生まれたのはおよそ 18 世紀中葉のこととされる(p.273-274)。これらに従えば、英国において、犬を愛玩と保護の対象にする視点の萌芽は 18 世紀にまで遡れることになる。

とはいえ、17 世紀や 18 世紀においては、犬は依然として使役され、場合によっては娯楽として虐待される存在であった。現代に残る図版のいくつかは、当時の英国やヨーロッパ社会における犬の位置づけを伝えている。

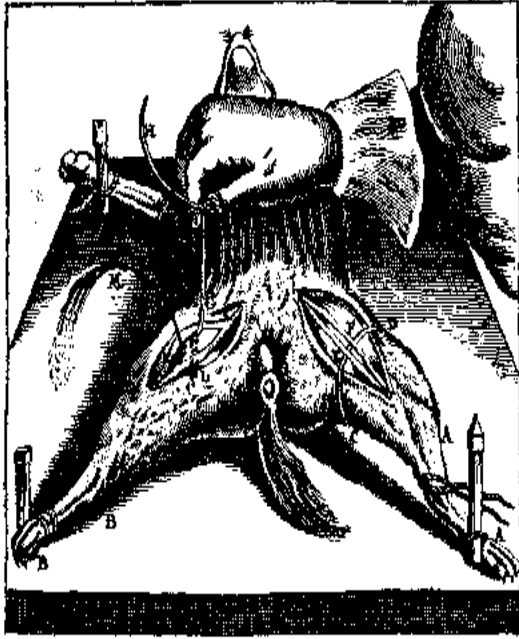


図 1. Walaeus(1640)



図 2. Hogarth (1751)

たとえば, Johannes Walaeus の図版 “Epistolae duae: de motu chyli et sanguinis: ad Thomam Bartholinum, Casp. Filium” (1640)は, 犬を生きのまま解剖する様子を示している(図 1)。また, 風俗版画家 William Hogarth は, 闘鶏をはじめ, 動物虐待をテーマにした作品を多く残しているが(櫻庭信之, 1987, pp.97-102), 彼の版画連作“*The four stages of cruelty*” (1751)の 1 枚目には, 矢を犬の肛門に突き立てて「犬いじめ」をする少年の姿が描かれている(図 2: 図版の一部を拡大)。Hogarth の版画については, タルトを差し出して虐待をやめさせようとする富裕な少年が描き込まれていることや, 犬を虐待した少年が連作の中で最終的に罰を受けることをふまえ, これを動物保護精神の萌芽と読み取ることも可能であるが, だとしても, 「動物に対する残酷さは, 当時のロンドンで, 取り立てて騒ぐこともない, むしろ当然とも思えるような日常的な事柄」(東, 2004, p.37)であったことは疑いようのないところである。

また, こうしたあからさまな残虐行為に加え, 犬を労働力として使役することも広く行われた。ミルクなどを載



図 3. Ouida (1872)の挿絵

せた台車を犬が牽引するというのは, ヨーロッパ各地で一般的に見られた光景であり, 19 世紀の後半に書かれた Maria Louisa de la Rame (Ouida)による *A Dog of Flanders*(1872)の挿絵にも, 荷車を引く犬の姿が描かれている。

一方, 19 世紀に入ると, 犬を保護しようとする法制的・社会的仕組みが次第に整ってくる。

英国における動物保護の歴史を考える場合、当時の国会議員であった Richard Martin の名を忘れるわけにはいかない。彼はその人道主義的行為から、時の国王に”Humanity Dick”と呼ばれた人物であるが、Martin は国会議員として、動物保護の法制に尽力し、同時に動物保護団体も創設した。青木(2002, 2004), 文部科学省(2004)ほかをふまえ、18世紀の英国における動物保護運動の高まりをまとめたものが表3である。

表3. 英国における動物権利擁護の略史

年号	出来事
1822	Martin提出の「畜獣虐待及び不当取扱防止法」(Martin法)が成立し、(去勢)馬・ロバ・牛などに対する残虐行為が禁止される。
1824	Martinが動物虐待防止協会を結成する。
1835	「動物関連法」が制定され、法による保護対象動物に犬が加わる。
1849	「動物虐待の効果的防止法」が制定され、鬪鶏が禁止される。保護対象動物に猫が加わる。
1840	動物虐待防止協会が王立(Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals)となる。
1854	「動物虐待の効果的防止法」が改正され、犬に荷物を牽引させることが禁止される。
1859	Newcastle-on-Tyneにおいて初のドッグショーが開催される。
1873	ブリーダー組織としてケンネル・クラブ(Kennel Club)が結成される。
1876	「動物虐待防止法」が成立し、動物を使った生体実験が禁止される。
1887	ヴィクトリア女王がスピーチにおいて動物愛護精神の必要性に言及。
1911	「動物保護法」が成立し、動物の権利が包括的に擁護される。

表3を概観すれば、英国において法的・社会的に動物の権利を擁護する動きは1820年頃から次第に顕在化したことがわかる。英国の19世紀は、ほぼヴィクトリア朝(1837-1901)と重なるが、他者への儀礼や礼節が過度に重視されたこの時期に「道義的関心の領域をとりまく境界線が、人類にくわえて他の動植物種を包含する」(トマス, 1989, p.221)ようになったことは偶然ではない。

以上の図版や文化史的事実をふまえると、英国において、労役と虐待の対象であった犬が、保護・愛玩の対象へと変容する転換点は19世紀初頭～中葉であったという仮説が得られるが、これは犬に対する新しい視点の確立を18世紀初頭とするOEDやトマス(1999)の見解とは若干のずれを含んでいる。説得力のある結論を得るためには、より大規模で客観的な調査が必要となろう。

3.2 言語コーパスに見る犬

3.1の議論を通して、我々は、英国における犬の文化的位置付けの転換を18世紀初頭とする立場と、19世紀初頭とする2つの見解を得た。もともと、英語史や法制史というのは体制的な文化表層であって、実際の民衆の意識をそれと同一に論じることはできない。近年の文化研究は、「その文化のただなかで暮らす者」、とくに「支配的な歴史の語りによって周縁化された他者や、抑圧されたマイノリティ」の拾いあげを重視しており(本橋, 2002, pp.228-229)、この意味においても、一般の民衆が犬に対して抱いていた素朴な意識の実相

をより詳しく探る必要がある。

このため、以下では、コーパス言語学の分析手法を応用しつつ、英文学コーパス(2. 3. 2)の分析を行う。具体的には、頻度(3. 2. 1)とコロケーション(3. 2. 2)に着目し、あわせてコーパスから抽出した用例を管見する(3. 2. 3)。

3. 2. 1 頻度調査

最初に注目すべきは、犬を意味する語の出現頻度の変化である。各時代のコーパスにおける犬という言葉の出現度は、当該時期における犬への文化的関心の度合いを測る基本的指標になると思われる。なお、英文学コーパスは 50 年刻みで 5 つのサブコーパスから構成されているが、それぞれのデータ量は異なる。ゆえに、相互比較が可能になるよう、それぞれ百万語あたりの換算頻度を求め、各時代における犬の出現頻度を概観することにした。なお、調査の対象にしたのは、語彙素(lexeme)あるいはレマ(lemma)としての dog であり、これには具現形としての dog/ dog's/ dogs が含まれる。

もちろん、犬を指し示す語彙としては、他に puppy, bitch, doggy, hound, kennel なども想定できるが、これらは他の意味での使用比率も多いと考えられるため、本調査では対象外とした。頻度分析の結果は下記の通りである。

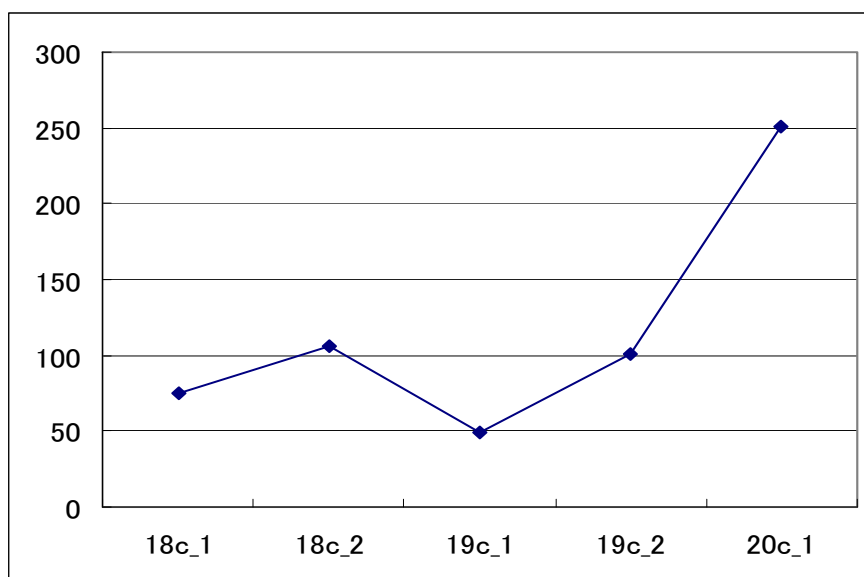


図 4. "dog"の出現状況

グラフにあるように、dog への関心の増大は、19 世紀後半以降、20 世紀にかけて観察される。これは、文化史的研究が、犬に対する視点転換の契機とした 18 世紀初頭、ないし 19 世紀初頭に比べると遅れているが、制度的な変化が民衆(より正確には、小説の読者である都市市民)の意識のレベルに浸透するまで一定の期間を要したと考えるべきであろう。文化における変化とは、多くの場合、断続的なものではなく、連続的・継続的なものである。

ここで注目すべきは、19 世紀前半に dog の頻度が一時的に落ち込んでいることである。文学史的に見ると、18 世紀の晩年から 19 世紀の初頭は、いわゆるロマン主義(Romanticism)が全盛を極めた時期に重なる。ロマ

ン派期の詩作には動物への連帯を表明したのも散見されるが(トマス, 1989, pp.257-258), 小説中で犬が前景化されることは多くない。現実の自然や社会よりも, その背後に潜む超越的アイデアを重視したロマン派の影響が, この時期の小説における犬の話題化の減少につながった可能性を指摘しておきたい。

3. 2. 2 コロケーション調査

前節では, dog という語彙素の出現頻度を観察してきたが, 当該語のふるまいを立体的に把握するには, 頻度に加えてコロケーションに注目する必要がある。Stubbs(2002)らが指摘するように, 語の意味は孤立的なものではなく, しばしば, コロケーションやフレーズによって重層的に決定される。

そこで, ここではまず, 時代別サブコーパスごとに, dog/dogs/dog's のいずれかを中心語とし, その左側 5 語目(L5)から右側 5 語目(R5)までの範囲内に総計 5 回以上出現する共起語を抽出した。抽出された異なり語の数は下記の通りである。

表 4. 共起語の数

	18世紀前半	18世紀後半	19世紀前半	19世紀後半	20世紀前半	平均
中心語	296	159	55	670	955	427
共起語	56	41	11	121	148	75.4
中心語/共起語比	5.29	3.88	5	5.54	6.45	5.23

上表中の「中心語/共起語比」が示すように, 特定の共起語と共起する中心語の数は平均して 5.2 語程度であるが, 20 世紀前半では, その値は 6.45 と高くなっている。中心語と特定語の共起頻度の高さは, 両語の結び付きの強さを示すもので, このことは, 犬に対する全般的な関心の高まりとあいまって, 20 世紀以降, 犬に関する特定の語彙結合・イメージ結合が醸成されつつある可能性を暗示している。

ついで, 上記の共起語を生起位置別共起語頻度表として整理した。各列は頻度順となっており, 5 回以上の共起頻度を持つ共起語の数が 10 を超える場合は上位の 10 語に限って記載している。

表 5. 生起位置別共起語頻度表(18 世紀前半)

N	L5	L4	L3	L2	L1	R1	R2	R3	R4	R5
1	THE	THE	THE	A	THE	AND	THE	AND	THE	A
2	A	TO	OF	THE	A	I	A	THE	AND	OF
3	AND	I	TO	AND	HIS	IN	NOT	I	IN	THE
4	I	AND	AND	LIKE	OF	OF	I	A	I	AND
5	YOU	ME	BE	OF	THAT	TO	OF	TO	AT	TO
6		IN	WHO	TO	LAP	THAT	AS	IN	A	IT
7		A	I	FOR	BULL	WHO	HORSES	ME	OF	I
8			WAS	AN	AND	THE	AND	NOT	WAS	FOR
9			IT	BUT	HANG	PATRICK	IS		HAVE	HIS
10			A	THAT	SETTING	AS	HIS		HE	SHE

表 6. 生起位置別共起語頻度表(18 世紀後半)

N	L5	L4	L3	L2	L1	R1	R2	R3	R4	R5
1	THE	DEATH	OF	A	THE	AND	WAS	HE	THE	THE
2	AND	OF	AND	OF	MAD	WAS	BE	TO	TO	AND
3	OF	THE	THE	SWORE	A	TO	YOU	THAT	I	A
4		IN	YOU	TO	YOU	IN	NOT	HIM	IN	
5				THE	HER	HE				
6				AND		SO				

表 7. 生起位置別共起語頻度表(19 世紀前半)

N	L5	L4	L3	L2	L1	R1	R2	R3	R4	R5
1	THE	THE		OF	THE		HAD	THE		
2				A	WATCH					

表 8. 生起位置別共起語頻度表(19 世紀後半)

N	L5	L4	L3	L2	L1	R1	R2	R3	R4	R5
1	THE	THE	A	A	THE	AND	THE	THE	THE	A
2	AND	A	THE	THE	A	IN	A	AND	AND	THE
3	OF	OF	AND	AND	LITTLE	WHO	TO	A	HE	AND
4	A	TO	OF	TO	AND	OF	AND	HIS	OF	OF
5	HE	AND	LIKE	OF	BULL	I	IN	WITH	TO	IN
6	I	HAD	FOR	LIKE	HIS	SAID	HE	TO	A	WAS
7	YOU	AS	IN	WITH	OF	HE	HAVE	IN	I	IT
8	TO	YOU	IT	FOR	YOUNG	BUT	THAT	WAS	IN	AS
9	LIKE	IN	YOU	IN	YOU	TO	AT	I	IT	WITH
10	WAS	THAT	AS	AN	OLD	WAS	MR	AT	HIM	HIM

表 9. 生起位置別共起語頻度表(20 世紀前半)

N	L5	L4	L3	L2	L1	R1	R2	R3	R4	R5
1	THE	THE	THE	THE	THE	AND	THE	THE	THE	THE
2	AND	AND	AND	A	A	TO	A	A	AND	A
3	A	A	OF	AND	GREY	OF	AND	AND	TO	AND
4	OF	OF	TO	LIKE	OF	IN	HIS	TO	A	TO
5	TO	TO	A	OF	LITTLE	CART	IN	WAS	WAS	OF
6	WAS	YOU	WAS	TO	THAT	HE	I	HE	I	IN
7	IN	SHE	WITH	WITH	HIS	WITH	HE	HIM	YOU	WITH
8	I	AS	YOU	FOR	RED	AT	TO	HIS	OF	FOR
9	HE	HIM	HE	THAT	HER	ON	AT	OF	IN	IS
10	IS	I	THAT	AS	OLD	I	YOU	FOR	HE	THAT

以下、名詞の意味を最も直裁に限定する L1(中心語の左隣)共起語に焦点を当てつつ、特徴的な共起パターンを検討してゆきたい。まず気付くのは、18 世紀前半から 19 世紀にかけては、L1 位置に犬の労働力としてのタイプや様態を定義する語が散見されることである。

bull dog, setting dog (18 世紀前半)

watch dog (19 世紀前半)

bull dog (19 世紀後半)

ブルドッグとは、そもそも、英国を含むヨーロッパ全域で行われた「牛いじめ」(bullbaiting)において、観衆の娯

楽のために、牛を攻撃するよう改良された犬種のことである。また、セッター (setting dog) は、人為的に改良された狩猟犬である。[1]の例では、正体の分からぬ怪異な音が、ブルドッグのしゃがれた吠え声にとえられている。

[1] At that instant, Mr. Pickle's ears were saluted with such a strange noise... This composition of notes at first resembled the crying of quails, and croaking of bull-dogs... (*The adventures of peregrine pickle*, by Tobias Smollett [18 世紀後半])

これらの語が比較的早い段階に集中的に出ているということは、当時にとっては、犬は今日的な意味での共感や感情移入の対象ではなく、むしろ、その使役上の役割に人々の関心が限定されていたことを示唆している。

また、18 世紀後半のサブコーパスを見ると、L1 位置には、the に次いで形容詞 mad が頻出している。当時の小説の筆者・読者にとって見れば、犬は、愛玩対象には遠く、むしろ、その粗暴さが強く意識付けられていた可能性が高い。

一方、19 世紀後半以降になると、明らかに上記とは別種の形容詞群が観察される。

little dog, young dog, old dog (19 世紀後半)

grey dog, little dog, red dog, old dog (20 世紀前半)

こうしたコロケーションは、19 世紀後半になり、ようやく、人々の関心が犬の年齢・状態・外観などに向かうようになったことを示す(こうしたごく一般的な形容詞が共起語としてこれ以前に出現していないことは興味深い事実である)。これらの形容詞に、明白な共感的感情移入の痕跡を示すものは確認できないが、少なくとも、犬をそれ自身として関心と描写の対象にする視点が 19 世紀後半以降に生じてきたと見ることは可能であろう。

18 世紀後半のヨーロッパ文化において、いわゆる「山の発見」がなされ、かつては交通の障壁と認識されていた山が、ロマン派運動に伴う人々の意識の劇的な転換に伴い、突如として、崇高性と永遠性の象徴となり、賛美と憧憬の対象になったことはしばしば指摘されるが(ニコルソン, 1989)、19 世紀後半のイギリスにおいて、これと同様の「犬の発見」が起こった可能性は高い。

ところで、L2 位置の共起語に注目すれば、19 世紀後半と 20 世紀前半のサブコーパスにのみ、with という前置詞が出現していることに気が付く。20 世紀前半の場合は、L3 位置にも with が頻出しており、両者を合わせれば dog 左方位置における with の頻度は顕著に高くなっている。

[2] "Who is the gentleman with the dog?" he asked of the old woman who reappeared. (*The American*, by Henry James [19 世紀後半])

[2]の例に示すとおり、これらは with [a/ the/ his/ grey...] dog などの連語の頻出の結果であり、人と犬が連れ立って行動することが 19 世紀後半以降に一般化したことを示す傍証である。

3. 2. 3 コーパス用例の管見

文学作品をコーパスとして電子化することで、作家や時代を横断しつつ、dog を含む用例のすべてを総覧することが出来る。ここでは、18 世紀から 1 つ、20 世紀から 2 つの用例を取りあげ、英国文化における犬のイメージの新旧の典型例を確認しておくこととしたい。

[3] So, when two dogs are fighting in the streets, with a third dog one of the two dogs meets, with angry teeth he bites him to the bone, and this dog smarts for what that dog has done. (*Miscellanies*, by Henry Fielding [18 世紀後半])

[4] Here came an errand-boy; here a woman with a dog on a lead. The fascination of the London street is that no two people are ever alike... (*Room of One's Own*, by Virginia Woolf [20 世紀後半])

[5] It was winter-time, and I wore a big-flapped black overcoat, half cloak. Under the cloak-sleeves I hid the puppy, who trembled. It was Saturday, and the train was crowded, and he whimpered under my coat. I sat in mortal fear of being hauled out for travelling without a dog-ticket. (*Rex*, by D. H. Lawrence [20 世紀後半])

[3]の用例では、喧嘩する犬たちが描かれ、その粗暴性がリアルに前景化されている。一方、[4]の用例では、手綱をつけて犬を散歩に連れ出す光景が描かれており、犬との散歩が 20 世紀初頭のロンドンにおいてごく自然な文化の一部となっていることがうかがえる。さらに[5]の用例になると、現代的な犬のイメージはいっそう顕著になっている。犬用切符(dog ticket)がないため、外套の袖に隠して電車に犬を連れ込んだ語り手にとって、犬はもはや、愛玩と共感の対象となる現代的な意味での伴侶動物そのものである。

4. まとめ

4. 1 犬のイメージの変遷

本稿では、英国における犬のイメージの変遷を、社会文化史的視点、および、コーパス言語学的視点から立体的に検証することを目指したわけであるが、こうした複合的アプローチによって、使役動物から伴侶動物と変わる犬のイメージの変容メカニズムの一端がある程度解明されたとと言える。以下、本稿で明らかになったことを確認しておきたい。

- (1) およそ 18 世紀以前においては、犬は荷役運搬などの労働力として使役され、犬に対する虐待も一般的に散見された。
- (2) 一方、pet という語の初出に見られるように、同じ 18 世紀の初頭ごろより、犬を保護しようとする視点も萌芽するが、影響はごく限定的であった。
- (3) 社会制度の上では、19 世紀の前半ごろから、当時のヴィクトリア朝的な時代精神ともあいまって、犬などの動物保護の精神が高まった。
- (4) 文学作品における犬への言及は、現実界を超えた超越的真理を模索しようとするロマン派運動が盛んであった 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて落ち込みを見せるが、19 世紀後半以降、20 世紀にかけて爆発的に増加する。

- (5) 19 世紀後半を転換点として、一般人の意識の中にも、犬そのものへの新しい関心が生じ、犬を人の身近な伴侶として認識する新しい視点が確立した。

以上の(1)～(3)は社会文化史的アプローチに基づく知見であるが、加えて、コーパス分析の手法を援用することで、(4)～(5)の補完的知見を新たに得たことになる。すでに述べたように、文化的変化は連続的なもので、「犬の発見」の時点を正確に決定することは困難であるが、以上をふまえれば、犬に対する新たな認識は、18 世紀初頭ごろに局所的に萌芽し、19 世紀初頭ごろから法制・行政に取り込まれ、さらに半世紀を経た 19 世紀後半から 20 世紀にかけて、一般の人々の意識のレベルに浸透したというおおよその見取り図を立てることが出来るであろう。

文化的変化はまた、直線的なものではない。犬を労働力として使役していた時代においても、勤勉で忠実な犬に対する信頼や愛情は存在していたであろうし、現代のように犬がもっぱら伴侶動物とみなされる時代においても、なお、犬を使役目的で使用することは続いている。しかし、こうしたアンビバレンツを含みつつも、大きな時間的スパンで見した場合、18 世紀から 20 世紀にかけて、犬の基調イメージは確実に変化したと結論付けることが出来る。

4.2 本研究の課題と今後の展望

本研究は、従来の社会文化的研究方法に内在する資料選択における代表性の脆弱さをふまえ、1700 万語の英文学コーパスから得られた客観的計量データに基づいて議論を行おうとしたものである。大型コーパスの利用は、いくつかの興味深い事実を明らかにし、議論の客観性を高める上できわめて有用であった。

今後は、現行コーパスの中身をより精練し、研究の精緻化を進めることが一つの課題となろう。たとえば、サブコーパスの量的バランスの調整、コーパス収録対象とする作家の多様性の拡大などについては、なお検討の余地がある。また、一作家による複数のテキストを、現在のように、作家の生年を基準として一つのサブコーパスに集約するのではなく、テキストごとの執筆年代を基準としてより細かい分類を行うことも可能であろう。コーパスデザインとその分析手法を不断に見直すことによって、質的分析を補完する、妥当性の高い量的分析手法のあり方をさらに探ってゆきたい。

参考文献

- 青木人志 (2002). 『動物の比較法文化:動物保護法の日欧比較』. 東京:有斐閣.
- 青木人志 (2004). 『法と動物—ひとつの法学講義』. 東京:明石書店.
- 東ゆみこ (2004). 『猫はなぜ絞首台に登ったか』. 東京:光文社.
- Hunston, S. (2002). *Corpora in applied linguistics*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- McEnergy, T., Xiao, R., & Tono, Y. (Eds.). (2005). *Corpus-based language studies: An advanced resource book*. Oxon, UK: Routledge.
- 文部科学省 (2004). 「動物の愛護管理の歴史的変遷」. 文部科学省自然環境局動物の愛護管理のあり方 第 1 回 検 討 会 配 布 資 料 4. Retrieved September 20, 2006, from <http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/meeing/index.html>
- ニコルソン, マージョリー・ホープ (1989). 『暗い山と栄光の山:無限性の美学の展開』. 東京:国書刊行会.

- [小黒和子訳. 原著:*Mountain Gloom and Mountain Glory*, 1959].
- 本橋哲也 (2002). 『カルチュラル・スタディーズへの招待』. 東京:大修館書店.
- 櫻庭信之(1989). 『絵画と文学:ホガース論考』. 増補版. 東京:研究社出版.
- Stubbs, M. (2002). *Words and phrases: Corpus studies of lexical semantics*. Malden, MA: Blackwell.
- トマス, キース (1989). 『人間と自然界:近代イギリスにおける自然観の変遷』. 東京:法政大学出版局. [山内昶監訳.原著:*Man and the Natural World : Changing Attitudes in England 1500-1800*, 1983].

Changing Image of Dogs Seen in English Culture: From the Viewpoints of Society, Culture, and Language

Shin'ichiro ISHIKAWA

Abstract Dogs are now widely said to be a “man’s best friend.” However, the image of the dogs as a man’s companion is not so old. The aim of this paper is to examine how the image of dogs has changed in the modern British culture. As previous cultural studies tend to be dependent on fragmentary cultural materials and they often lack objective macro-view, in this paper, we will utilize the methodology of corpus linguistics and attempt to approach the dog image in British culture from the multiple viewpoints of socio-culture and language.

Keywords corpus, image analysis, cultural studies